

介護短歌の世界とその表現

中 西 洋 子

はじめに

短歌の世界では正岡子規、石川啄木、山川登美子などの病床詠がよく知られているように、現代においても病む者の側からの作品は脈々として絶えることがない。病むことの辛さや苦しさ、そこから生まれるさまざまな詠嘆は、短歌という表現形式と深く結びついており、ひとつの伝統を持った短歌のジャンルと言ってよいだろう。しかし最近では、介護に関わっての短歌、とりわけ介護をする側からの短歌が、活字をはじめテレビ、ラジオなどいろいろなメディアを通して増えている傾向にある。言うまでもなく、とみに高齢化が進みつつあり、介護されることも介護することも、否応なく直面せざるを得ない深刻な現実が、その背景にあることは疑いようがない。老老介護が珍しくなくなった時代である。

「介護」という語は極めて一般的に用いられる言葉であるが、特に日常生活の中に浸透し、定着するようになったのは、一九〇〇年代後半から生まれた、介護に関する種々の社会福祉制度や、それに伴って作られた名称などによるところが大きいと考えられる。たとえば、介

護保険、介護福祉士、介護支援、介護認定、要介護などのように非常に多い。つまり、「介護短歌」という言葉を使うとき、介護本来の意味とともに、このような社会福祉用語の影響が働いていると見てよいのだろう。看護の意味も含めた「介護」である。

「介護短歌」と言う呼び方は、「ケータイ（携帯電話）短歌」と同じように、短歌の種類として扱われており、現代短歌の場でもならずしも市民権を獲得しているわけではない。その作り手の多くは専門の歌人ではなく、介護をすること、されることをきっかけとして、短歌を作るようになった人々が関わっているからかもしれない。しかし、右のような社会的土壌の中から、必然的に芽生え出た呼び方であることは確かである。いずれにせよ、現代短歌においても、あるいは社会福祉の観点からも、近年の新しい一領域としてもっと注目してもよいように思う次第である。

本稿では新聞やテレビなどで紹介される、いわゆる短歌愛好家の作品群について、そこに展開される介護の世界と表現を探ることにより、それが介護の現場にどのような影響もたらしているか、を考えて見ようとするものである。以下、右に従って「介護短歌」という呼称を用

いることにする。

一

介護短歌について考える時、先ず思い浮かぶのはNHKテレビ「福祉ネットワーク」(3C)の番組で紹介される、「介護短歌」(「介護百人一首」)の時間である。「介護短歌」という呼び方はここから始まったと考えられるだろう。^{注1}これは、二〇〇四(平十四)年一〇月二〇日を初回として、現在まで一七回(再放送は除く)にわたって放映されており、現在も続行中である。^{注2}内容は介護体験を詠んだ短歌を募集し、その応募作品の中から選ばれた作者について、その介護生活や体験談の悲喜こもごもを、数首の短歌を折り込みながら映像とともに紹介するというものである。介護百人一首の一首はその数首の中に含まれているが、ここでは介護短歌作品としてとらえ、同列に扱っていくことにしたい。

では、選ばれた歌にはどのような世界が表現されているか、いくつか見てみよう。なお、作品を理解しやすくするために、それぞれ簡単な説明を加えておくことにする。^{注3}

なおまた、新聞紙上などにも同様に、介護の現場から生まれた短歌が採りあげられることがある。これについても触れておきたい。

A 朝の介助一通り終えて横になる又やさしくなれる一休み
病弱の義妹と暮らし四十年介護の我も老いの身となる

リハビリに歩行の夫快調と杖をくるりと回してみせる
手伝うぞと洗濯物をたたむ夫やさしき心ぎこちなき手で
義妹に悟られまいと頭痛薬笑顔で介護の一日終わる

(〇四・一〇月二〇日)

・ 作者は六九歳。肺を患い、酸素吸入が必要な七四歳の義妹を夫とともに介護。夫も病に倒れる。

B 好みるし寿司供ふればうつしゑの妻よろこぶか灯明ゆらぐ

半世紀妻がたちたる厨房か病むその妻に今宵粥炊く
病む妻の言ふをメモして年の瀬を主婦等に混じりスーパームぐる
風呂場へと背負へばあはれ長病める妻のあさひ双の掌に入る
病む妻のひた待つ三階の鍵の鈴手に鳴らしつつ階段昇る
へまた来ると言ひて病室出てゆく夫の背いたくまろくなりたり

(〇四・一〇月二〇日)

・ 作者は八八歳。地元の短歌講座で講師を務める。脳梗塞で半身不随の妻を自宅で介護して一六年。へへ内は妻の作。

C お荷物じゃ死んじやいたいと嘆く母マスコットだよと抱き慰む
公園の落ち葉拾ひて床に敷き野山想ひて足踏むリハビリ
弱るほど強くわが手を引き留(とど)む面会時間を過ぎし夜な夜
な

我よりも先に死ぬなと言ひし父痴呆によりて苦を免るる
晩秋の楓(かえで)色づきはらはらと父も散りゆくフレディーの

ごと

(〇五・二月二日)

・作者は五三歳。脑梗塞の母親を介護。後に認知症を患う父親の介護も。

D呼吸器の音確かなる子の寝息枕もとに聞くわが子守唄

看護婦にただ今女房とデイト中せいっぱいのわれへの想い
お父さん留守番頼むよ智みてて静かにみつめる額縁の中

(〇六・五月一〇日)

・作者は二五歳になる脳性小児マヒの息子を介護。ともに介護してきた夫は、六年前に病死。

E若き日は夫婦げんかも多かりき酒におぼれし遊びもありて

色白き顔骨皮うすくなり眼だけは澄みて童顔のごとし

たった今迄椅子に居りたる夫みえず我里に急ぐ後姿あり

畑仕事夫を誘いて見守りし花を抜き取り幼子に帰る

我胸の悲しき日々を忘れさせ野菜作りに励む毎日

(〇六・七月一三日)

・作者は兼業農家の主婦、七六歳。認知症の夫を八年間介護。

F物言わぬ夫と暮らして五十年はころぶ目元釜飯の味

今何時ひとときの間も待たずして夫のことばに我はうんざり

病む前のはげしき性も消え失せて今は穏やか糸のからまり

ひとときの会話持ちつつもつかの間の心のどこかに我を置き去り

病みながらもおもまざる我的胸母のぬくもりひとときの夢

(〇六・七月一三日)

・作者は七〇歳。認知症、糖尿病の夫を八年間介護。

G足腰の立たぬ妻をば車椅子押す目の前に白髪増しゆく

うとうとと座して微睡む寸時にも粥の焦げつく夢で目覚むる

片方の臥して強まる夫婦愛悔いなく結ぶ夫婦の絆

されるよりして遣る吾の有り難さ思えば介護辛くあるまじ

絶望の妻に快癒の兆し見ゆ白衣が神の袖にまみえん

ユーモアを交えるも佳し強い事云うも介護の術と知るらむ

(友の詩(うた) 繰り返し読むきびしくも優しき看護見習う日々あり)

(〇六・五月一日)

・作者は七九歳、心臓と膝を患いながら、くも膜下出血で倒れた妻を一年介護。()内は友人が寄せた作。

H介護に明け介護にくれて十六年ふと鏡見る老いしわが顔

〈介護され心疼きて十六年哀しきよりもおかしき様なり〉

(するされる介護の日々を十六年二人の絆いよ深まる)

(〇六・五月一日)

・作者は六六歳。脳内出血のため半身不随となった夫を一六年間介護。へへ内は夫の作。また、()内は友人の作。

Iくり返す夫の粗相に甲高きわれの地声がトイレにこもる

叱られて眠れる夫の手を握る明日から叱らぬわれでありたし

蹣跚と夫の車椅子押すわれに力貸しませ亡き父母よ

置き場所を忘れて探すわが眼鏡惚けし夫がかけてすませり

悩めるもどうせこの世はケ・セラセラ童子の夫のリズムに乘ろう

(朝日新聞 ○五・三月二八日)

・作者は進藤てる子、八三歳。記事のタイトルに「痴呆の介護十九年を四五十首に」とある。歌集『伴に生きて』は一九年間の夫の介護を詠んだもの。

以上、AからHまではそれぞれ同じ作者である。資料としては、十七回分(総集編、ダイジェスト版も含む)総て提示すべきであるが、ここではその中から表現の比較的整っているものを中心に、介護のケースなどのなるべく異なるものを選択した。(ただし、二の中で日付のある作はA〜H以外よりの引用)。表記は新かな、旧かな、文体も口語、文語、その混合体などさまざまである。同じ作者の作品の中でも統一していないのも見受けられる。作歌経験は、Bのように短歌講座の講師という例を除いては、ほとんどが初心者であり、介護を始めてから歌を作るようになったという例もある。Iは新聞に紹介された記事である。

詠まれている内容、発想は、介護する対象や環境などによって当然異なるが、しかしそれほど大きな差はなく、以下に述べるようにむしろ共通する点もいくつか見出せる。また、この内A、B、E、F、G、H、Iはいわゆる老老介護である。介護者の多くは妻、主婦であるが、

ここでは夫による妻の介護がB、Gで詠まれている。

二

作品を抄出しながら見ていこう。

義妹に悟られまいと頭痛葉笑顔で介護の一日終わる

風呂場へと背負へばあはれ長病める妻のゐさらひ双の掌に入る

弱るほど強くわが手を引き留 (とど) む面会時間を過ぎし夜な

夜な

色白き顔骨皮うすくなり眼だけは澄みて童顔のごとし

物言わぬ夫と暮らして五十年ほころぶ目元釜飯の味

足腰の立たぬ妻をば車椅子押す目の前に白髪増しゆく

右の作品では、義妹に対して自分の体の不調を感じさせまいとする思いやり、長い闘病でやせ細る夫を、あるいは白髪の増す妻をいとおしむ思い、衰弱しつつ渾身の力で作者を引き留めようとする母のさびしさを、辛さとともに受け止める心、目元の変化で読みとる夫の感情の動きなど、いずれも相手へのこまやかな心遣いがにじみ出たものばかりである。「弱るほど強くわが手を引き留む」、「妻のゐさらひ双の掌に入る」、「眼だけは澄みて童顔のごとし」、「ほころぶ目元」など、常に寄り添い、注意深く相手を見守りつづける、介護の現場ならではの観察眼が巧まず表現されている。

今何時ひとときの間も待たずして夫のことばに我はうんざり

病弱の義妹と暮らし四十年介護の我も老いの身となる

介護に明け介護にくれて十六年ふと鏡見る老いしわが顔

くり返す夫の粗相に甲高きわれの地声がトイレにこもる

とは言え、いつ果てるとも知れない介護の日々である。自分にとってかけがえのない肉親、夫婦ではあるが、心身ともに抱えるものは尋常ではない。同じ言葉をくり返す会話への苛立ち、人生の楽しみを味わう折なく、いつの間にか老いてしまったという嘆息、粗相を重ねる夫への、抑えきれずに吐き出す感情的な声。きれいな事ではあり得ない現実からのため息や叫びである。

介護とは眠れぬことと知りし今一夜の眠りに代わるものなき

ああまたも言葉の刃投げつけぬ真夜も眠らぬわが病む夫に

(〇五・七月二七日)

共に見て共に話すを契りしに返らぬ声に苛立ちの声

吾半生地蔵の如く居る夫を若き日想い支え過ぎゆく

(〇五・六月二九日)

リハビリで現状維持もままならずこれから先の頼るすべなし

(〇五・六月二九日)

回ってた歯車突然狂いだし義母我とみに暗やみの中

(〇五・四月二七日)

真向えば笑顔で話し横向けば頬に流るる心労の日々

(〇五・四月二七日)

あざみの歌うたい疲れて夫よりも我のねむたく今日も終わりぬ

(〇五・五月二五日)

先掲A～I以外にも右のような作が散見する。「一夜の眠りに代わるものなき」には何とも切実な思いがこもる。ここにはとり繕うことなく、ありのままの自分の心がぶつけられている。不安や絶望感を抱え、自分の人生に消極的になりながら。しかし一方、そうした感情とは裏腹に、後悔や反省の気持ちに苛まれもする。「ああまたも」にはその思いが如実だが、同じ作者は「叱られて眠れる夫の手を握る明日から叱らぬわれでありたし」とも願うのである。こうした内面のはげしい葛藤は、介護経験を持つ者ならば誰しもくり返し経験するものであり、右のような作に出会った時、ああ、自分だけの思いではなかったのだと安堵し、納得するにちがいない。

三

リハビリに歩行の夫快調と杖をくるりと回してみせる

悩めるもどうせこの世はケ・セラセラ童子の夫のリズムに乗ろう

置き場所を忘れて探すわが眼鏡惚けし夫にかけてすませり

愛妻の名前忘れる夫にくし頭を軽くたたいてやりぬ

(前出・あざみの歌と同作者)

物言えぬ妻の笑顔が愛しくて三十二年の介護続きぬ

(〇五・五月二五日)

とかく重たく暗くなりがち介護の日々ではあるが、右のようなほっとさせられる歌もある。介護される側の表情やちょっとした仕草で、

介護する者の気持ちは左右される。笑顔や、杖をくると回すのを見るだけでこころが明るくなり、励みとなるのだ。いつの間にか作者の眼鏡をかけてしまっている認知症の夫、妻である自分の名前を忘れた夫に対して、余裕をもった愛情あふれるまなざしに重ねて、巧まぬユーモアが表現されている。「ケ・セラセラ」も介護の辛さを乗り越えるひとつの術なのだ。介護の日々には大切な世界であろう。

お荷物じゃ死んじやいたいと嘆く母マスコットだよと抱き慰む

呼吸器の音確かなる子の寝息枕もとに聞くわが子守唄

若き日は夫婦げんかも多かりき酒におぼれし遊びもありて

されるよりして遣る吾の有り難さ思えば介護辛くあるまじ

病む前のはげしき性も消え失せて今は穏やか糸のからまり

介護に明け暮れる日々はまた、介護をする側に（される側も）何らかの心の変化をもたらすようだ。若い頃や病気をする前には悩まされたことも、それを歌に詠むことでいつしか帳消しとなる。また、介護される側が抱きやすい心の負担に対して、「マスコットだよ」と返す思いやり、あるいは、呼吸器の音を通して聞こえる子の寝息を、「わが子守唄」とする受けとめ方、さらには、妻の介護をすることを「吾の有り難さ」と感謝する気持ちなど、心打たれる表現である。「優しさ」と一言では片づけられない、祈りにも似た謙虚な思いが伝わってくる。同時にまた、そのように捉えることで、自分自身の励みとしている点も、見逃してはならないだろう。

病みながらもおもまざる我の胸母のぬくもりひとときの夢
妻よりも母の心となりてより看取り安けき日のあることも

（前出・あさみの歌と同作者）

ここでは、妻という立場から見れば、わりなく複雑な思いをぬぐいきれないものがあるが、それを越えて夫の「母親」になろうとする心の働きを受けとることができる。そこにははかり知れない寂しさがよこたわる。

また来ると言ひて病室出てゆく夫の背いたくまくなりたり

介護に明け介護にくれて十六年ふと鏡見る老いしわが顔

介護され心疼きて十六年哀しきよりもおかしき様なり

一首目はB群の妻の作。自分を介護する高齢の夫の身を気遣う思いが、下句ににじみ出ている。二、三首目はH群、妻の歌と夫の返歌で、文字通り相聞歌である。夫の「哀しきよりもおかしき様」に、介護される側の心情が ажわい深く、またそれが充分に発揮されて秀逸である。またG群、H群の友人の歌「友の詩（うた）繰り返し読むきびしくも優しき看護見習う日々あり」「するされる介護の日々を一六年二人の絆いよ深まる」は、それぞれ介護に奮闘する友への尊敬の念のこもった応援歌だ。これら相聞歌、贈答歌という歌の長い伝統が、このような介護の現場で息づいていることに、少なからぬ驚きを覚えな いではいられない。非日常ともいえるべき日常生活の中から生み出された余裕であり、生きる知恵でもあろう。

四

以上、介護する日々の、さまざまな思いを託した介護短歌について、そこにどのような世界が展開され、どのように表現されているのかを見てきた。作者たちは専門の歌人ではなく、先に述べたような、介護をする中から湧き上がってきた思いを表現するために、短歌をはじめた人々が大半を占めている。従って、言葉の表現は時にたどたどしく、難点も多々見受けられる。しかし、言葉に飾りがなく素朴であるだけに、返ってその思いがストレートに伝わってくる。それがこうした歌の身上であろう。

つまり、介護にたずさわる人々にとっての短歌とは、心の叫び、支え、救いであり、夫婦、家族の愛情確認の場、あるいは自己確認や、自己形成の場でさえもある。さらにはまた、明日の介護のエネルギー源でもあっただろうと考えられるのである。今後こうした歌の世界に注目していきたい。

なお、紙幅の関係で他の資料^{注4}に触れられなかった。近刊歌集とともに次の機会に採りあげる予定である。

注1 あるいは、二〇〇一年新葉館出版の安森敏隆著に『介護百人一首・男のうた365日』があり、同氏が「NHK福祉ネットワーク」の「介護百人一首」に関わっていることを考え合わせると、介護短歌、介護百人一首という名称は同氏の発案かもしれない。

注2

「NHK福祉ネットワーク」による十七回分は次の通り。(日付け、順序もママ)

- ①〇六年五月一日 ②〇六年七月二日 ③〇六年七月一三日
- ④〇六年二月二日 ⑤〇六年二月一日 ⑥〇五年七月二七日
- ⑦〇五年五月二五日 ⑧〇五年六月二九日 ⑨〇四年一〇月二〇日
- ⑩〇五年二月二日 ⑪〇五年一月三〇日 ⑫〇五年一〇月二六日
- ⑬〇五年一〇月二六日 ⑭〇五年一月一四日 ⑮〇四年十一月一七日
- ⑯〇五年四月二七日 ⑰〇五年九月一八日

注3

表記は、原文では一句ごとに一字あけとなっているが、本稿では一行に収めた。また、個人情報保護法では、「学術研究の目的には転載を許される」とあるが、病氣の内容などを考慮に入れ、作者名を掲げないことにした。ただし、Iは歌集として出版されているので記名する。

注4

安森淑子・安森敏隆著『介護うたあわせ 介護・男と女の25章』(二〇〇二・京都修学社)など。